

中支戦線にて

愛媛県 戸田清繁

私は大正十三（一九二四）年二月二十日、愛媛県周桑郡丹原町長野八十三番地で、父・李治、母・ヒサの長男として生まれました。家族は、妹が二人いましたので、五人家族でした。昭和六（一九三一）年三月、尋常高等小学校に入学、昭和十三年三月卒業し、同年四月に青年学校に入学しました。昭和十七年、本科卒業、四月から研究科に入学しました。

そして松山連隊区の小野村演習場で、三カ月の青年学校補助指導員としての訓練を受け、その後、下級生の指導を担当することになりました。その間、銃剣道の段級試合で初段を取り、また「歩兵操典」「作戦要務令」「軍人勅諭」「戦陣訓」等、軍人として必要な典令などの勉強をしつつ、入隊に備えていました。

は言葉では言い表すことが出来ないほどの苦勞の多い行程でした。

宿営地に到着しても我々後統部隊には、満足な宿営施設も無く、時には豚舎、時には煉瓦の建物でも片側しか無く、全くの青天井の建物の中で毛布一枚も無いという、野宿に近いものでした。食事の支給も無く、個人個人の炊事で、水は悪く、満足な食物も無い有様です。外は見渡す限り銀世界で、山の生木を切って暖をとるのですが不十分で、安心して寝ることも出来ない始末でした。

街の住民は旧の正月を迎えて、お祝いをしている様子で、子供達も爆竹を鳴らして楽しく遊んでいました。これに引き換え我々は降り積もる雪の中の行軍という労苦の連続で、戦友の中には、この雪の中で倒れる者もあって、倒れたまま起き上がれず、そのまま息を引き取る者もある状況でした。

空には敵機の攻撃があり、部落には人影もなく、我々の食糧も現地での調達も出来ません。野生の

昭和十九年四月、徴兵検査を受け、甲種合格となりました。その時に松山連隊区の徴兵官・陸軍大佐立山直行より表彰状を頂きました。その表彰状には「學術、技芸に熟達したるものとして、他の模範とするにたる」との文言がありました。

そして昭和十九年九月十日、香川県丸亀の西部第六十三部隊に入隊しました。この部隊は歩兵第二百三十四連隊鯨部隊の要員で、本隊は北支の山西省路安に駐屯する北支那派遣軍壘第一四七六部隊宮崎部隊で、我々はここに派遣されました。そしてここで初年兵教育を受け、第一期の検閲も済ませました。

その後、部隊は北支から中支へ移動、さらに、南京から漢口へ移動し、ここで米軍機の空襲に遭いながら、揚陸物資の揚陸作業という使役に従事しました。夥しい揚陸物資の野戦倉庫への運搬作業でした。

昭和二十年二月二日、漢口を後に武昌に渡りました。この行軍の行程は約八里、この行軍の苦勞なるまでが大変でした。

ようやく春がきて、これらの野草の芽吹きを待つのですが、採った野草を茹でたりして食するに当たっても塩も何も無いという有様でした。

長沙から衡陽に着くと、ここで半数の戦友が秋水部隊に転属することとなり、同郷の石原君ともここで別れることとなりました。来陽では気候も暖かくなり、外套を返納しました。そして五月二十五日に連隊本部に到着しました。

こうして長い本隊追及の行程でしたが、ここで西川連隊長の訓示を受け、部隊編入、編成が行われました。私は土屋少佐の指揮する第二大隊の第五中隊に編入され、戦闘体制が完了したのです。

六月初旬に入ると雨季となり、この雨の中での三南作戦が開始されました。南雄、竜南へと連日連夜の追撃に次ぐ攻撃のための行軍が続きました。

七月六日には贛興に大隊は集結しました。そのころ真っ赤に熟した桃がなっており、皆で生気を

取り戻したことを思い出します。

七月も終わるころ、ある渡河地点で、第四十師団長の宮川中将は部隊員に対して「兵は休め、敬礼はよろしい、馬には草を与えよ、農作物は傷めないように」との暖かい言葉を残されました。

そして南昌に向かって進軍中に、南昌の西二十里ほどの地点では大きな戦闘が行われ、多数の戦死者ができました。そして八月十八日の夕暮れ、部隊の集合が命ぜられ、ここで終戦の情報を聞かされました。皆食事も喉を通らず、中隊長の訓示と君が代の合唱、戦友たちの目には涙が溢れていました。

そして我が部隊は揚子江を出て九江に渡り、安慶に下り、無湖に渡り、ここに数日間駐屯している間に使役にしました。そして食糧の受領や身辺の整理をしていた十月中旬、馬安山（旧八幡製鉄工場の在った）で武装解除を命ぜられました。小銃、機関銃、自動車などすべてを中国軍に引き渡し、丸腰になった裸の兵隊となりました。馬安山

では食糧の受領や衛門の衛兵勤務などをして過ごしていました。

春になって南京に下りました。そして南京の光華門の城外に在ったお寺で、蚊帳を張って駐屯し、班ごとに中国軍のトラックへの砂の積み込み作業などの使役に従事していました。

そのころ町には米軍のジープが走っていました。そして四月下旬になって、ようやく上海へ集結の命令が出ました。各中隊ごとに無蓋貨車で一昼夜汽車に揺られ上海に着きました。ここで復員船の順番待ちとなりました。

いよいよ乗船開始となりますと、すべての持ち物を広場に並べ、中国軍の検査が終わり、五月二十四日、出港、五月二十六日、博多港に上陸しました。その夜は福岡のお寺で一夜を過ごし、翌朝、列車で尾道へ、ここから今治港に着きました。

一緒に入隊した戦友、特に戦死した戦友を思い出す時に、平和な日本、そして世界が戦争のない平和でありますようにと祈念致します。